

●レポート

社会に対する仏教僧の役割—その起源と発展

スリランカ留学僧 中野良教

一 緒言

各国における社会奉仕のあり方はそれぞれの国事情や社会構造により様々である。現代の日本においては、政府の一般的な福祉政策や社会保障を別にして、宗教団体により組織された

社会奉仕活動の主目的は人々、主に精神障害に悩む人々の安寧にあるのである。しかし、他の国々、特に第三世界では、奉仕活動は貧困、栄養不良、健康不全といった他の必要事を満たすためになされている。この点、物質的な快適さ

や工業文明に容易に誘惑される日本の若者達は、往々にして精神的に病弱であり、その結果生命を失つてしまうことがしばしばある。可能な限り我々の社会活動により彼らを正しい道につかせるよう、彼らを適切に取扱う必要がある。片や、老人層についても大きな問題がある。

定年退職後、もはや若かつた頃のように社会で有効に活動しえなくなり、心理的に落ち込む老人も多い。そのような人達にたいして、宗教的福祉社会は生命の自然に満足することの必要性の悟りを持たせることができる。これは我々の

生命の元初からの注目を要する一般的事実である。仏教の精神的奉仕を通した社会活動によつて、人生の固有の諸特性に関する釈尊の教えの助けを得て、これらの問題を解決することが可能である。

2 仏教僧侶の役割の根源的理念

仏教僧侶の役割については、*Sangha* の聖職位階のそもそもの初めにおいて、釈尊が明瞭に指摘しておられる。Order の六十人の若者を集めて釈尊は次のように言われた・「ビツク達よ、私は人間の、神の、すべての束縛から開放された。汝らビツクも、人間の、神のすべての束縛から開放された。やあ、ビツク達よ、行きなさい、そして行脚しなさい、多衆の利益のため、多衆の安寧のため、この世への思い遣りから、善のため、利のため、神と人の安寧のために、汝ら一人が同じ道を行ふことなれ。ビツク達

よ、初めに素晴らしい、途中にて素晴らしい、終りにも素晴らしい教えを、心にて、言葉にて、説きなさい。聖なる完全、至上、純粹の生を広めなさい。」¹⁾ この言葉から、二つの重要な点を考える必要がある、即ち、一、僧侶は(Arahantship)を達成しなければならないこと、二、人々の安寧のために教えを説かなければならぬことである。

釈尊によれば僧侶に四種類ある。一、道を極めた者(Maggajino)、二、道を説く者(Maggadesako)、三、道で生活する者(Maggejivati)、四、道を穢す者(Maggadusi)の四者である²⁾。

このうちの一一番目の者は不安を克服し、悲しみを去り、*Nibbana* に愉しみ、超然として、人々や神々の指針となる賢者として讃えられる³⁾。

二番目の者は、全教義の知識を持ち、それを人々に解説を得しめるべく教説する僧侶である⁴⁾。Arahatship の道の定めにしたがつて生きる

者は第三の僧侶である⁵⁾。第四種の僧侶は腐敗し悪徳に身を委ねる者である⁶⁾。これら四種類のうち第一番目の者が最高の者として称賛されることとは明らかである。第二種の僧も、その定義から、第一種の僧と同様に人々の安寧のために多大の奉仕が出来るのである。しかし、第三種の僧は、自らの利を計ることに専心して他者の安寧を求める暇がない。この注解によれば、第四種の僧は、社会のためのみならず、本人のためにも有害である⁷⁾。上記のことから、第一種と第二種の者は、人々に奉仕する傾向のゆえに、人類の福祉の発展に有用な僧侶である。事実、どんな僧侶も、正しい知恵を身に着け健全な基盤を踏まえていれば、必要に応じ社会において何らかの務めを果すことができる。上に述べたことは、釈尊の口から出た例えば次のような言葉から裏付けられる、「慈悲の心をもつて生き、責務に完全となれ、そうすれば喜びに満ち

て悩みに別れを告げることができるよう。」⁸⁾、「佛陀の教えに専念する者は、たとえ若きビックといえども、雲無き月の如くこの世を明るく照らす者である」⁹⁾。

上述のように、Dhamma を守る Dhamma に生き、Dhamma を説き、Dhamma を教えることは、それぞれ相切り離せない重要な仏教僧侶各人の役割である。このゆえに、これら二つの徳性を完全に達成し実践により高度の経験を積んだゴータマとその偉大な弟子たちは不屈の人格鍛錬に有能な者¹⁰⁾、人々に道を見る光りを照らす者と称される¹¹⁾。

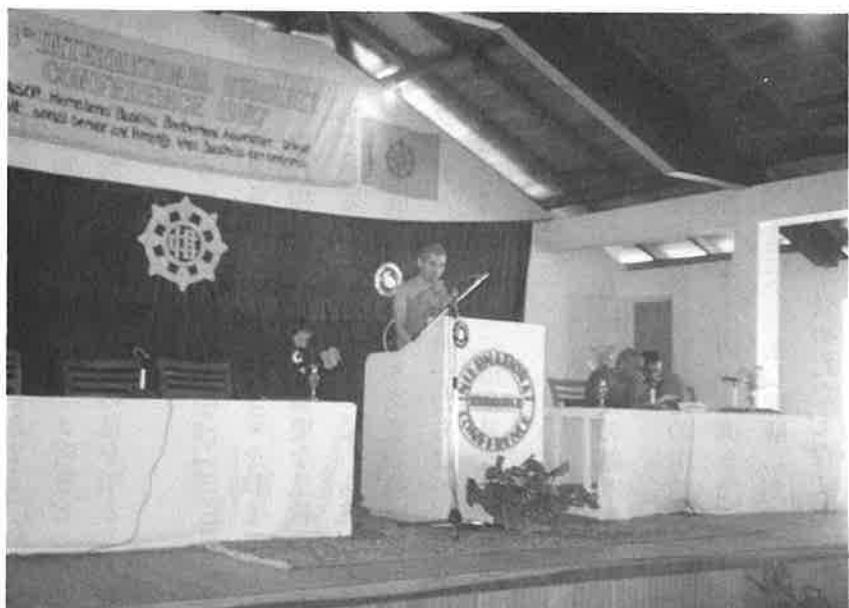
3 初期仏教における社会奉仕の基本理念

社会奉仕の理念は釈尊の教えの主題の一つ、即ち、自己の理解(attan)¹²⁾から導き出される。Nikayas では、自己の完全な理解に到達した者(atattanu)¹³⁾を釈尊が讃めたえたことを我々

は知る。その者は、人が相互に愛するものであることを知り、故に自らを愛す（attakama）¹⁴⁾。したがつて、人は他人を害してはならない（Mettā）¹⁵⁾と叫う理念がこの教義から当然出てくる。この根本の相において我々は社会の衆人にに対する佛教徒の根源的態度の概念を知るゝ」とがである。

自己愛と他者愛という根本理念は、幾つかの仏典に見られるように¹⁶⁾、更に Metta（愛ある親切）と Karuna（同情）へと発展している。さらに、我々は釈尊の弟子たちの幾つかの詩の中に、彼らが師ゴータマのことを全世界¹⁷⁾に対する親切¹⁸⁾と同情の偉大なる聖人等と言つてゐるのを知る。これらはゴータマ・ブッダが Metta と Karuna を心得したと叫う実事を物語る好例である。

Metta ～ Karuna の基本概念は、実行を重ねることで、Mudita（感謝の喜び）～ Upekkha



(脱執着) へと発展した。Metta. Karuna. Mudita. Upakkha の四要素は四倍の人生への同系の一整体を成す¹⁹⁾。

Mahayana 仏教では、上記四概念の理念は次の四つの無限の徳²⁰⁾として説明されている。一、慈悲の無限の徳、二、同情の無限の徳、三、喜びの無限の徳、四、不偏の無限の徳。上述の意味において、崇高の人生の構成部分であるこれら四要素はいずれも現世の利益と安寧に、そして究極的には幸福につながるものである。特に Mahayana 仏教が進化しつつあった時代には、人類の精神的発展に向けてこれら四つの無限の徳は強調され、社会奉仕の根本思想として採用された²¹⁾。

かくて、仏教徒の社会奉仕の目的は、自らの福利(attakama)の達成に始まる仏教徒としての Metta & Karuna へと、愛の基本概念に基づくものであった、と結論づけることができる。

る。ついに Sariputta が述べてゐるようには²²⁾、釈尊の生涯を象徴するいの仏教徒の愛はその至上の教義それ自体と等しいものである。

4、Mahayana 仏教における社会奉仕の基本

偉大な同情者としての釈尊の至上の生涯は、Mahayana 仏教における Bodhisattva の理想の生涯と比肩しうるものである。

Mahayana の經典と文典は、しばしば強調される Bodhisattva の理想に従って、人々の安寧を絶えず説いている。その傾向は特に中国と日本で極端にまで発展をみる。Bodhisattva 教徒としての経歴は、人々の安寧と開発のために一仏陀となる固い決心から始まる²³⁾。この決心は「Bodhi の心」と呼ばれ、必要とあらば自己の生命を犠牲にすることも辞さないといふ非常に堅固なものである。

西暦十三世紀の日本の道元禪師²⁴⁾もその著作

のなかで次のように Bodhi の心を強調している、「Bodhi の心に目覚めることは、あらゆる感覚ある生き物が渡り終えるまでは自分が（悟りの）彼岸へ渡らぬことを誓うことを意味する。

平信徒であれ僧侶であれ、天界或は斯界に住む者は皆速やかにこの誓いを立てるべきである……。 Bodhi の心に目覚めたものは既にして全人類の師である。七歳の少女といえども仏教徒の四種類の師となり万物の母となることができるのである。（仏教においては）男女は完全に平等だからである。」²⁴⁾

上に述べたのと同じ理念から出てくる誓いが Bodhisattva の次の四大誓いの中にある。

一、万物が如何に無数であろうとも、私はそのすべてを救うことを誓う。

二、私の妄念が如何に無尽蔵であろうと、私はそのすべてを根絶やしすることを誓う

三、dharma の教えが如何に広大無辺である

うとも、私はそのすべてを修得することを誓う。

四、仏陀の道が如何に無限であろうと、私はその道に従うことを誓う。²⁵⁾

上記の四つの誓いのうち、特に一番目の誓いは前述の道元の言葉の理念に一致する。この一番目の誓いが愛他主義であることは明らかである。 Bodhisattva のこの四大誓いは Mahayana 仏教徒の間では共通の誓いとしてよく知られている。

道元は人々のために次の四種類の智²⁶⁾を説明している。一、寛大—精神的物質的施しをすること。二、愛ある言葉。三、慈悲ある心—身体、言葉、心の善行にて生ある物を益すること。四、識別—無差別、又は自己と他者とを区別しないこと。Mahayana の經典にしばしば出てくるこれら一群の実践事項は Cattari-sangaha. vatthuni²⁷⁾ (同情の四基盤)²⁸⁾ と呼ばれるペー

リ語に対応する。Mahayana 経典に見るかぎり、何れの四つの実践項目は、生ある万物をもとめて解脱せしむよへんやる Bodhisattva の運動の基盤として数え上げられてゐるのである。簡単に言えば、何れの四つの実践は仏教徒の同情行為であると悟つゝことがである。

上記のように、仏教僧侶は、衆者に道が見えぬよう光を担う者(ukkadhara)として社会で責務を果しながら人々の安寧のために教義を学び、教える者たるべからざる。上記の指針によつて我々が自らを鍛錬すれば、争いや不和の無い調和ある社会が実現しそう。Metta & Karuna といった仏教徒の愛に立脚した我々仏教徒の社会奉仕が、異なる問題を有する如何なる国においても育成可能なことは疑いないとひのである。

釈尊の次の言葉は銘記すべしである。

「慈悲の心をもつて生ぶ、責務に完全たれ、

そへやねば輪びに満ちて、悩みに別れを告げ
るゝべからず。」

- 1) Vi, Mahavagga, 20 ページ; SBE, 112-113 ページ.
- 2) Sn. 84 3) 同 86 4) 同87 5) 同88 6) 同89 7) Sn-A 162 ページ 8) Dhp. 376; SBE 88.ページ 9) 同 382; SBE. 89 ページ 10) Purisadammasarathi 11) Ukkadharo manussanam 12) V.I, Mahavagga. 23 ページ 13) A.IV,113-114 ページ 14) A.II, 21 ページ 15) S.I, 75 ページ 16) A.IV,150-151 ページ 17) bbalokanukanukampaka (Therag,625); anukampaka(同 1045) 18) karunikamahamuni (同 1143); karunaka(同 870); soft-hearted 19) Catubrahma-Vihama.20)Catuay apramamani(SK). ness.PTS.Dic.537 ページ参照 21) Taishoshinsyudaijokyo (T),第14巻 538,554 頁 22) Mih.394 頁

※尚昨年十一月八・九日の両日ロロノボ郊外のカダワタで行われた国際仏教徒会議のテーマ「仏教徒は社会に対して何を為し得るか」において講議を要請され「社会に対する仏教僧の役割—その起源と発展」と題して発表。